

第5研究課題 第5分科会

「教職員の専門性に関する課題」

研究主題 「教職員の資質・能力の向上と教頭の関わり」

ー I C Tの効果的な活用等による学びの保障についてー

四国中央市立川滝小学校 宇田 智子

1 研究の概要

四国中央市では、学校教育重点ポイントの六つの中に「確かな学力を基盤とした未来を拓く力の育成」「教職員の資質能力の向上」を示している。その中で、学校 I C T推進による G I G A しこちゅ～StuDX（本市 G I G A スクール構想）の実現を目指し、各校で教職員の I C T 活用能力の向上及び授業改善の推進に取り組んでいる。また、1人1台端末の導入に向けて、昨年度から市教育委員会主催の研修会が多数企画され、情報教育主任を中心に研修会に積極的に参加し、教職員一人一人の力量を高めてきた。昨年度、環境整備のための工事が順次行われたが、学校により1人1台端末の利用開始時期が異なった。そのため、年度当初は学校間格差があった。しかし、1学期の取組により、児童生徒への日常的な活用を工夫し、教職員も児童生徒も I C T を身近に感じ利活用することによるどの学校も慣れてきた。

市の方針を自校の実情に合わせて具現化するために、どのように教職員に働き掛けていくか、教頭の果たす役割は大きいと考える。

2 研究の内容

実践内容	教頭としての関わり
(1) 四国中央市各小中学校の取組 ア 教頭研修会での情報交換	<ul style="list-style-type: none">○ 教職員アンケート○ 校内研修体制へのマネジメント
(2) 自校の取組 ア 不登校児童への I C T を活用した支援 イ 上分小学校との交流	<ul style="list-style-type: none">○ 不登校児童の支援○ 上分小学校教頭との連携・相談○ 学級担任への指導・助言
(3) 成果と課題	

3 教頭としての今後の課題

- (1) これまでの学習形態の良さと I C T 活用の良さをうまく組み合わせるために、教頭として、教職員へどのように働き掛けていくか。
- (2) 教頭自身の I C T 活用能力をどのようにして高めていくか。

1 はじめに

児童生徒のICT活用スキルを高めるためには、教職員のICT活用指導力の向上は極めて重要である。本市教育委員会では、昨年度から様々な研修を企画し、教職員をサポートしている。また、本年度は、ICT活用の様子を情報共有できるように教育委員会が主となって「GIGAスクール通信」を発行し、各校の取組を紹介し、学校間の差が生じないよう指導力の向上に努めている。

本市教頭夏季研修会において「ICTの効果的な活用等による学びの保障について、教頭としてどのように推進していくか。」を協議題に各校の取組の成果や課題について意見交換をした。研修会を通して、教頭としての資質の向上及び使命感を再認識し、意識の高揚を図ることができた。本研修の内容を各校に持ち帰り、自校の実態に合った取組を工夫していく必要がある。

2 研究の内容

(1) 四国中央市各小中学校の取組

ア 教職員アンケート

1学期末に「1人1台端末の活用状況に関するアンケート」（回答者数:399人）を市教育委員会が行った。アンケートの結果、教職員の59.1%が1人1台端末を活用して授業改善に取り組んでいた。しかし、指導内容にも個人差があり、実際の活用はまだ十分とは言えない状況が分かった。

イ 校内研修体制へのマネジメント

まず、個別最適な学びと協働的な学びの実現のためにICTの活用が不可欠であることを示し、教職員の意識改革を図った。「愛媛県の教員が身に付けるべきICT活用スキルチェック表」を活用し、教職員一人一人の指導力の確認を行い、教職員のICT活用指導力の向上を図るために職員研修を計画した。研修主任、情報教育主任に指示し、各校の実態に応じた校内研修体制を工夫した。（年間指導計画の見直し、週案への記述による確認、ミニ研修、授業研究等）

次に、教育委員会が主催するICT研修会に、全教職員が参加できる体制を作り、教職員が研修を受けやすい環境づくりに努めた。そして、教頭自らも研修会に率先して参加し、教職員に指導・助言できるスキルを身に付けるとともに、学ぶ姿勢を示していった。

今年度になって教育委員会は、新規採用や市外からの転入教職員、昨年度受講できなかった教職員のために昨年度行った研修（ロイロノート操作等）を再企画した。実際に授業の中で使うことで、その必要性を感じたり利便性に気付いたりし、昨年度は希望しなかった教職員の受講もあった。ICT活用の良さを知ることは、苦手だったり、負担感を持ったりしていた教職員の意識を変え、教職員のICT活用指導力の個人差が解消されてきた。

夏季休業中には、児童生徒に端末を家庭に持ち帰らせ、端末での課題を出したり、オンラインでの学習を実施したりして、各校の実態に合わせた実践を行った。端末を使って家庭でできる課題を考えたり、端末上に課題を提示したりすることや、オンラインでの授業について教職員が話し合いをすることで、取扱い上での注意事項や必要な準備物等が明確になり、それを実践することで教職員の意識もスキルも高まった。

さらに、風通しの良い職員室をつくることで、教職員同士がICTについて気軽に質問し合える雰囲気が出た。職員室内でも、ICTが苦手なベテラン教員が得意な若手教員に質問する場面が増え、共に学び合う姿が見られるようになった。互いの良さを認め合う場にもなり、より教職員の資質が高まった。今後は、更にベテラン教員の持ち味とICT活用の良さを融合させた最適な学習環境を創造していくことが望まれる。

授業を参観し、教職員一人一人の良さを日常的に伝えたり、ICT活用状況をホームページ等で保護者や地域へ啓発したりしていくことも教頭として大切にしたい部分である。

今後、教頭会としては、1人1台端末の導入により「できるようになったこと」を整理し、情報共有を行う。そして、各校の研修体制等を見直したり、授業改善に役立てたりし、

本市全教職員のICT活用指導力を高めていく必要がある。

また、本市の取組として研修、交流を深め合っている「小中連携授業実践交流研究会」においても、1人1台端末を使用する展開例が公開され、各校の授業改善が着実に進んでいることがうかがえる。3学期には、本市で先進的な取組をしている小学校がデジタル教科書の利活用例を紹介する予定である。調整を行い、各校から参加し、学びを共有し、教職員のスキル向上を目指したい。

(2) 自校の取組

本校は、全校児童28名の小規模校で、低・中・高学年で複式学級になっている。学級担任は、常に2学年の授業を同時に進めなければならない。教頭も理科等週13時間の授業を担当し、複式授業の解消に努め、単学年での授業時間が確保できるようにしている。

ア 不登校児童へのICTを活用した支援

相談室登校の6年生A児は、集団に入りにくい特性があり、4年生のときから関わってきている。今年度になって、1人1台端末が整備されたことを利用し、総合的な学習の時間の修学旅行で行く広島について調べたことの発表会では、5・6年教室での発表会に相談室でMeetを使って参加することができた。事前に、児童の発表の仕方、教室の様子を写す端末をどこに置くかなどを担当と打合せした。初めての試みではあったが、得たものは大きかった。児童の発表の位置と端末が離れていて、発表の音が聞き取りにくかった点は、次の機会に改善するように努めた。

また、A児は、5年生2学期より他校の通級指導教室を利用し、今年度になって、担当教員が変わった。担当教員がA児と顔合わせをしたいと、A児が登校している日に来校し、A児と話をして関係づくりに努めた。さらに、A児との関係が持続できるように、登校が不定期なA児のためにオンライン(Meet)での短時間の会話を続けた。A児は、オンラインでの会話を楽しみに、その日は登校していた。1学期最後のオンライン後に担当教員に送ったメッセージには、「次は、通級指導教室へ行きたいです。」と書いていた。2学期になり、通級指導教室のある日には、登校し通級するようになった。

教頭は、担当教員の連絡調整の窓口となり、校長への報告・相談を行い、児童が通級指導教室へ通えるように支援した。また、オンラインの準備等は休憩時間に学級担任がするように役割分担し、学級担任とも連絡を取り合っていた。

イ 上分小学校との交流

(ア) 6年生担任の願い

本校6年生は6名(内1名が不登校)である。6名はお互いに気心も知れているが、学級の中でのそれぞれの役割も固定化されている。それが良いときもあるが、個々の成長を妨げている部分にもなっている。学級担任には、もっとたくさんの人と触れ合い、たくさんの考えを知る機会を持たせ、中学生に向けて更なる成長をさせたいという思いがあったので、校長と相談して他校とのオンラインでの交流を提案した。実施するに当たり、担任には、打合せや準備で時間を取らせることになること等を話した。担任からは、「ぜひやらせてほしい。」というやる気に満ちた返事があった。担任の願いや思いを後押ししたい、それが児童の成長につながると思うと、私もわくわくし、やりがいを感じた。

以下のとおり、校長の指導の下、両校の教頭が窓口となり、日程の調整等を行い、学級担任が安心して交流について話し合いを進め、実施できるように努めた。

(イ) 教職員に向けてアンケートの実施

交流に対して、両校がメリットを持って取り組まないと長続きしない。そこで、両校の教職員に対してアンケートを取り、お互いのメリットとデメリットを確認した。

両校とも、メリットとして、「多様な見方、考え方に触れる良い機会である。」「コミュニケーション能力の向上につながる。」「他校のことを知ることができる良い機会である。」が挙げられた。また、デメリットとして、「事前準備や打合せで教師の負担が増え

る。」「時間の確保」を挙げられたが、「デメリットは特に感じない。」という意見もあった。担任同士の打合せに Meet を使い、具体物を示しながら、計画をまとめていった。教頭も随時、意見を述べることができ、短時間で有意義な打合せができた。

(ウ) Meet による交流

第1回の交流は、自己紹介を行った。交流当日までに、ロイロノートで自己紹介カードづくりをした。当日は、一人一人が電子黒板に映し出される上分小学校の児童を前のめりになり食い入るように見ている。最後に、国語科で学習している「一番大事なものは」について上分小学校児童が作文を発表した。その発表を聞いて、本校児童は、自分の書いたものを見直したり書き加えたりして、学習を深めることができた。児童の生き生きとした楽しそうな表情から、交流して良かったと心から思えた。交流後の感想では、両校とも満足を感じ、次の交流でしたいことを書いていた。



【オンライン授業の様子】

第2回の交流は、上分小学校児童の間で流行っている「ペットボトルのキャップ積み競争」を短時間（15分）で行った。本校児童にとっては、画面の向こうのたくさんの児童と競争ができ良い刺激となった。

Meet による交流は、本校の若手教員にとって良い刺激となり、他校の先輩教員から ICT 活用だけでなく、児童への支援や言葉掛け等のスキルを学べる良い機会となることを実感した。

(3) 成果と課題

ア 成果

市教育委員会が開催する研修会と各校の校内研修の工夫により、教職員の ICT 活用指導力が市全体として向上している。教職員が、授業改善に前向きに取り組み、「まずやってみよう」という雰囲気が各校にできている。その結果、児童の ICT 活用の機会も増え、児童の ICT 活用スキルが高まっている。

本校では、オンラインを活用することで、他校の児童とつながり、児童が多様な考え方に触れることができ、学びの保障につながった。また、担任がオンラインでの学習について他校教員と協議し、実践して行く中で学びと成長を感じた。本校にとっては、これから児童数が減少する中で、必要な活動である。他校とのオンライン授業のスキルを全教職員が身に付け、6年生の成果を全校に広めていきたい。

イ 課題

ICT 活用は、手段であって目的にならないように、学習計画を立てる際に活用の効果を意識しているか、教頭としてアンテナを高くして教職員の活動を見守っていくことが大切である。また、研修や授業準備の時間をどこで作っていくか。教職員の働き方改革に逆行しないように見極めていくことも教頭として大切な役割である。

ICT 活用を通してのいじめ等につながらないように情報モラル教育についても各校で徹底していきたい。

3 おわりに

ICT の効果的な活用ができるように、教職員は授業改善に取り組んでいる。それを教頭として、指導・助言していくことが大切である。そのためには、教頭自身の ICT 活用スキルの向上が必要である。それと同じぐらい、教職員の思いや願いを感じ取ることが大切である。その思いや願いをうまく、学校の体制の中で反映させていくことで、教職員のモチベーションも上がり、自己有用感を持って、生き生きと活躍してくれる。教職員の資質・能力を向上するためには、何よりもこうした教頭の気付き、支援が大切だと感じる。教職員と共に失敗を恐れず新しいことに取り組む姿勢を大切に、これからもチャレンジを続けたい。